

東亜大学総合人間・文化学部公開講座「千夜一夜」要旨

第19話 生涯学習社会における
地域の少年教育

岡村 豊太郎 (スポーツ学研究室)

第20話 北ドイツの自然と町、
人々、暮らし

山本 達夫 (文化文明史研究室)

一. 生涯学習社会

1. 生涯学習の概念： いつでも（時間）、どこでも（空間） 内発的（動機）な学習
2. 生涯学習社会： いつ学んでも、どこで学んでも、学んだ成果が地域や職場で適正に評価される社会
3. 生涯学習（教育）出現の社会背景とその道のり： 激しい社会変化（技術革新）とこれに耐える新しい教育（学習）観（ユネスコの成人教育推進国際会議、ハッチングの「学習社会」）

二. 地域の少年教育

1. 地域の教育力の低下
 - 1) 「地域の教育力の低下」とは、2) 地域教育の威力（事例）
2. 地域の少年教育の特色： 意図的教育と無意図的教育、地域教育と態度形成
3. 地域の少年教育（団体）： 子ども会、スポーツ少年団、海洋少スポーツ少年団、ガールスカウト、ボーイスカウト
4. 子ども会活動とスポーツ少年団活動の意義と現状
5. 望ましい少年活動
 - 1) 子どもの手による活動、2) 組織と役割（子どもの役割と大人の役割）
6. 学校週5日制の活動と地域の少年教育
(平成17年9月18日実施)

ドイツの諺に「旅をすれば話の種ができる」(Wenn einer eine Reise tut, so kann er was erzählen.) というのがある。たしかに知らない土地へ行き、珍しい風物に触れれば見聞を広めることはできる。しかし単に「〇〇に行った」「〇〇を見てきた」だけでは土産話としては少々味気ないだろう。分刻みのバックツアーで名所・景勝地を駆け巡って写真は大量に撮ったものの、家に帰って「さてこれはどこだっけ？」というような旅行は空間の移動でしかない。空疎で疲れる移動へのやるせない憤懣が、せめて自分の足跡を残そうと文化遺産に名前を刻むという愚行に駆りたてるのだろうか。

旅の思い出は心の中に刻むものである。旅先の景観を外から眺めるのもいいが、現地の人びととじかに触れ合い内側からその土地を知るのがいい。筆者は昔たまたま留学生として大学町ゲティンゲンに滞在する機会を得て以来、さまざまな交友関係を通してこれまでドイツの一般家庭をしばしば訪問してきた。「ドイツ」と聞くと、風景や町並みよりも個々の友人たちの顔や彼らとの談笑が思い浮かぶ。

ドイツ人とのこうした交流の基礎は最初の留学時代に培ったものだ。滞独中、あえて日本人（社会）を避け、「旅の恥はかき捨て」を常に意識して行動した。おかげで多くの国のたくさんの人と知り合うことができたし、彼らがまたドイツ語の習得を大いに助けてくれた。言葉はやはり話せない、いや話さないと何の面白みもな

く、何の展開も生まれぬ。読めるからいいと自室にこもるのでは外国に来た意味はない。

部屋の外のゲティンゲンはとても国際色豊かだった。学期ごとに世界中から留学生が押し寄せる。いろいろな国の学生がたくさんいることは世界各地を旅行するよりためになる。互いの共通語であるドイツ語を通してさまざまなことを知り、発見できるからだ。とくに発展途上国からの奨学生、本国から政治亡命をただけの学生の中には本来優秀な人物が多く、彼らの語るころは大いに傾聴に値した。いま日々のニュースに接して「彼らならどう言うだろう」とふと考えるのは、そのときの影響である。

外国語を習得しても、急に性格が積極的になったり陽気な別人に変身したりするわけではない。語学学校のテレビ・コマーシャルにはよく快活雄弁にしゃべる生徒が登場するが、そもそも母国語で話せる以上の内容は外国語でも話せないことを忘れてはいけない。外国語の知識は現地の人との接点の最初のきっかけを与えるだけである。あとは本人が自分の中にどんな「話の種」をどれだけ持ち合わせているかにかかってくる。

旅の土産話を内容豊かに味付けするのは実は日ごろから話の種を自らの内に培う地道な努力なのである。その種を上手にまく人が旅先でも新たに話の種を集める、というのが先の諺の真意だろう。帰国して周りの人に興味深い話や心温まるエピソードを語り聞かせるのもひとつの国際交流である。その意味でも、骨の折れる外国語学習は「涙とともに蒔く者は、喜びとともに刈り取らん」(詩篇 126)なのである。

(平成 17 年 10 月 23 日実施)